

も、ちどり花になれ行くあだし身は

はかなきはほゞもうらやまれぬる

(古今集)

故の第五高等中學校々長平山乃大人の

一周年乃御祭に奉る歌の序

園 哲 雄

千里の遠き海山を隔つる人をこひわびてとる筆と。よま歳月をふととも。又返りごとおこするをりもあらむと。とる甲斐もころわらめ。されどとりてかひなきもれせ。なき君を思ひ。うたてさをのふる筆にちむありける。平山の大人の學校のことをいそしみながら。五月雨の晴間を照らす月とにも。雲かくきたまひしより。唯闇路に迷ふこゝちも。まださめやらぬまに。月日の流るゝと。淀河のよどむともなく。はや一年にめぐりあふ御祭の時にもなりけり。招けどもかへらす呼べども答へず。あそいたましあかなし。晋室七世の風にかへれる阮子もありしときけば。さあれかしど。をさなく慕ひ奉れることぞ。うき世の夢のとかあきならひなるらむ。抑大人はいままへみことかうぶり。出で、外國に學びたまひしも。ひとへわがみかどの御爲に。かれのまされるをとりたまふ真心にぞありけまば。やがて位山上りたち。やんごとなき人と仰かれて。真心のしるしあり。猶まきりに謀りたまふところありけむを。とからざりき去年の今日。やうやう四十の齡をこゆるはどの。さかりなる御身をもて。永くこの世を去りたまひしとは。斃せてやむとは耳

にきゝつるも。その實を大人に見侍りにけり。これと思ひこれを語りつゝ。せんすべをえらすぞあかる。さてもまたかゝ御いさをしを聞きつぎ語りつゝは。いふもよらなれど。數ならぬ身も御祭の庭に侍り。悲しさのあまり濃き墨もいつしか落つる涙のみづぐき深くなりて。得よむまじけれど。かひなくもかき出でゝ奉る一言を。あそれと見そなとし。みたまのふゆにより千萬のをしへ子のわざをして。いやますゝに敏く捷からしめたまひてよ。

烏部野の烟となれと天翔り見そなとすらむ國の榮えを

乾くまもあらで渡りし一とせば君をなみだの夢の浮橋

祭故平山校長文

教授 笠間益三

維明治二十五年六月八日再拜頓首謹祭故校長平山君之靈曰凡人事之興廢其理猶不可知況人之死生自有數存焉然則君之歿如未足深悲然交誼之深且厚共論史談文教務行爲如其情況豈不永思況君之德望可慕風采可追吾輩追悼不已誰謂之不宜相與談君之在日孀々不絕如縷如糸君之始長於我校恰當規模創設之際條緒未就之時能守舊貫之可仍又改弊習之太非奮勇敢之氣執公平之心周爰詢咨聿始舉開校之典朝野人士雲集唯恐後期職員生徒皆踴躍而喜以永建我校之根基歡喜